

子ども・若者の居場所づくりガイド

communication

対話編

## contents

- 02 子ども・青少年の居場所づくりの推進について  
神奈川県県民局次世代育成部青少年課
- 04 データでみる子ども・若者  
子ども・若者を中心につなごう！対話しよう！  
～地域の居場所のチカラは、コミュニケーションの豊かさで高まる～
- 08 君は君、我は我なり、されど仲良き  
沖縄大学 名誉教授 加藤 彰彦さん
- 10 『私たちが目指す居場所での対話』  
特定非営利活動法人 フリースペースたまりば 西野 博之さん  
特定非営利活動法人 バノラマ 石井 正宏さん  
プレイパーク遊 Being♡あしがら 山崎 由恵さん  
くすのき広場 吉澤 肇さん  
株式会社 フェアスタート・特定非営利活動法人 フェアスタートサポート 永岡 鉄平さん  
地域のお茶の間研究所さろんどて 早川 仁美さん
- 17 子ども・若者の居場所づくりフォーラム 2018.2.6
- 17 講演 大人が子どもや若者と対話すること  
慶應義塾大学特任准教授・NewYouth 代表取締役 若新 雄純さん
- 20 ワールドカフェ 今の大人・若者・子どもについて語り合おう
- 22 シンポジウム 子どもや若者にとっての「居場所」とは  
～居場所におけるコミュニケーション（対話）を考える～
- 27 知りたい・聞きたい・見つけたい  
My Favorite Movie,Book&Music
- 編集後記

友人二人が  
バスに乗っていた  
時のことだ。



### 循環バス（出典：2016 木陰の物語 新しい羅針盤）

公立児童相談機関、障害者相談機関の心理職 25 年を経て、1998 年に独立。仕事場 D・A・N 主宰。  
現在、立命館大学大学院教授を務めるほか、全国で家族療法のワークショップや講演会を実施。

イラスト・文：団 士郎さん SHIRO Dan

## 子ども・若者と対話していますか？ 大人同士の対話していますか？

現在の地域社会において、大人たちは、子どもや若者とどれほど関わりをもっているでしょう。

情報化が進み、人と関わらなくてもある程度生活していくことができる社会です。

しかし、それでよいのか考えてみる必要があるのではないのでしょうか？

人は、人との関わりの中で悩みや苦しみを持つこともあるけれど、希望や喜びを得ることもできます。地域社会の慣習や生活文化を自分の暮らしに取り入れるようになります。関わりの積み重ねの中で協働することの面白さを知り、トラブルやリスクを解決・処理する術も学びます。

地域社会は多種多様な人が存在する場であり、想像の範囲を超えた経験や関係性が生まれる可能性に溢れています。

居場所は、それらの必然を捉えながら、可能性を追求する場でありたいものです。子ども・若者ばかりではありません。大人同士の関係も重要です。

今回のガイドのテーマは、対話＝コミュニケーション。会釈をする関係→声を掛け合う関係→ちょっとした世間話をする会話の関係→対話ができる関係。

わたしたち大人と子ども・若者がお互いの固有性を認めつつ、互いに関心を持ち合う関係に、時に共感を持つ関係に、そして未来への希望を共に持つ関係に…

対話する勇気をもって、耳を傾けましょう。想いを伝えましょう。

すぐ前の  
先頭座席に  
座った子どもが  
泣いていた。  
3年生くらいかと思った。



## 子ども・青少年の居場所づくりの推進について

神奈川県県民局次世代育成部青少年課

県では、平成28年度から、関係機関との連携により、ひとり親家庭の小・中学生等が夜間に安心して安全に過ごすことができる居場所づくりのモデル的な取り組み(※)を進めるとともに、その取り組み等を県内市町村や民間等に普及する事業を実施しています。

現代は、地域における人と人の関係が希薄になり、若者も大人も地域と接点を持つことが難しくなっている状況があります。こうした中、有識者や地域活動実践者等が、青少年に関する総合的施策の樹立に必要な重要事項を調査審議する機関「神奈川県青少年問題協議会」では、若者が主体となって大人とパートナーシップを組みながら地域づくりを進めることが重要であるとの視点に立ち、平成28年度から29年度にかけて、「若者による地域づくりのカタチ」をテーマに、若者、大人、地域の課題や取り組みの方向性などについて調査審議を行いました。

審議の過程では、次のとおり「4つの論点」から若者と地域の現状と背景を整理し、「若者」と「地域の関わり」を考える「3つの視点」をまとめました。

また、若者の意識や実態を理解するため、実践検証事業として「多世代ワークショップ」を開催し、議論の検証を行いました。「多世代ワークショップ」では、20代から60代までの年代の方に御協力いただき、多世代が安心して交流する中で若者が日頃感じていることを自然に語るができる場となりました。こ

の実践検証事業を踏まえ、「場の創出」、「つながりの創出」、「対等な関係性の構築」、「相互理解と協働」、「寛容な場の醸成」という5つのポイントが提言としてまとめられたところです。

具体的には、町内会、子ども会、商店街の集まり、子ども食堂や地域住民の居場所など、さまざまな場に参加する誰もが、安心して過ごせるよう、人々が互いを受容し、共感し合える場を構築することが重要であり、共感的な関係性を育む人材を育成することが必要であるとの提言がなされました。

県では、こうした提言や、平成28年度に作成した「子ども・若者の居場所づくりガイド(導入編)」を踏まえ、地域に関わる皆様に、子ども・若者の居場所における「対話」の重要性をご理解いただくとともに、居場所づくりの取り組みを進める上で参考としていただくことを目的として、このたび「子ども・若者の居場所づくりガイド(対話編)」を作成しました。皆様の活動の一助となれば幸いです。

※モデル的な取り組みについては「藤沢市子どもの生活支援事業(夜間の居場所事業)」(P3)をご覧ください。

「神奈川県青少年問題協議会」の詳細につきましては、県ホームページをご覧ください。

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f5326/>

### ● 4つの論点

- 1 若者の「チカラ」について
- 2 大人と若者の関係について
- 3 若者の参画について
- 4 地域の状況について

### ● 3つの視点

- 1 若者と大人がつながり、ともに場をつくる
- 2 若者と大人がともに経験する
- 3 若者と大人がともに進む

### ● 5つの提言

- 1 「地域と地域づくり」～場の創出～
- 2 「人と人をつなげる」～つながりの創出～
- 3 「若者と大人が共感し合える関係を育む」～対等な関係性の構築～
- 4 「若者と大人がともに地域をつくる」～相互理解と協働～
- 5 「場づくりを担う人に求められること」～寛容な場の醸成～



何かあったのかな？  
子どもの世界にも  
いろいろあるから  
…  
と  
思  
っ  
て  
い  
た。

## ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ 藤沢市子どもの生活支援事業（夜間の居場所事業） ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

### 藤沢市子ども青少年部子ども家庭課

藤沢市では、平成28年の秋から、神奈川県と協働し、子どもたちの夜間の居場所「子どもの生活支援事業」を市内2カ所（「こども戸まるだい」「キッズ☆こもでい」）で実施しています。

この事業は、さまざまな事情から養育環境等に課題がある子どもを対象に、基本的な生活習慣の習得、学習習慣の定着、食事の提供等の支援を行い、安心して夜を過ごすことができる場を提供することを目的としています。

#### 事業開始までの経緯

神奈川県から、子どもの夜間の居場所を提供する事業の実施について照会があり、また当時、藤沢市でも同様の事業の必要性について検討していた経過があったことから、県・市で協調して事業を実施することとなりました。

#### 運営事業者について

月12日以上の開所、既存施設の活用、食事の提供ができること等を条件として公募型プロポーザルを実施し、NPO法人2者を委託先として決定しました。

#### 子どもたちの様子

小学生が主で、中学生も少人数ですが来ています。来所人数は4、5人から、多いときで7、8人ほどです。過ごし方はさまざまで、学生や地域のボランティアと一緒に話をしたり、絵を描いたり、ゲームをしたり、ダンスや歌を楽しんだり、宿題をしたり…。また、

節分の豆まき、クリスマス会などの年中行事も開催しており、子どもたちは楽しみにしてくれています。

中には、生活習慣が身に付いていないため、「こんにちは」「いただきます」が言えない子がいます。また、感情のコントロールが難しく、みんなと一緒に遊んだり、手伝いをしたりすることができない子もいます。

#### 居場所での取り組み

子どもたちにとって、「ここに来れば、ご飯が食べられて、安心感と楽しいという気持ちを持てる」場とすること、これを第一として考えています。



そして、来所する子どもと家庭の状況について、背景等を把握し、必要な支援へつなげていくこともこの事業の重要な役割であると考えています。

開設直後は、なかなか子どもたちも落ち着かず、関係づくりができないなど、困難な状況となることもありましたが、スタッフやボランティアは、何が起きても焦らず、慌てず、子どもたちに寄り添い、一人ひとりと向き合って対話をし続けることによって、少しずつ子どもたちの心を開いてきました。

今後も、子どもたちにとってこの場所が、新たな文化に出会い、将来に希望を持つことにつながるような場となるよう、取り組みを進めていきたいと考えています。



ハロウィンで作った小物

- こども戸まるだい  
運営：認定NPO法人 ぐるーぶ藤
- キッズ☆こもでい  
運営：特定非営利活動法人 ワークスコープ

降車口近くなので、降りる客は一樣に、この子の様子に目をやり、黙って下車していった。



データでみる  
子ども・若者

## 子ども・若者を中心につなごう！対話しよう！

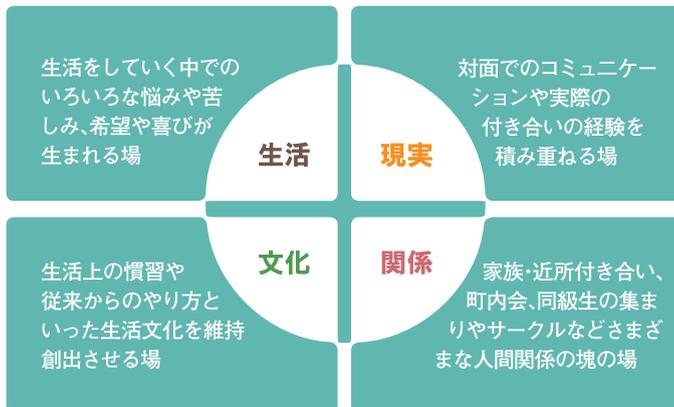
～地域の居場所のチカラは、コミュニケーションの豊かさで高まる～

今回のテーマは「コミュニケーション」。「子ども・若者の居場所におけるコミュニケーション」は、現代の子ども・若者が直面する課題を改善するためにも重要です。地域が持つ役割・可能性を捉えながら、子どもや若者に、そして、大人たちにとっても、居場所をどのようなコミュニケーションの場としたらよいのか考えてみたいと思います。

### 地域の4つの視点

地域とは、次の4つの視点を有する場。そして、地域の子どもや若者の「居場所」もまた、これらを有する場でありたいものです。家庭や会社は、基本的に同質的な集団ですが、異質な関係性が複合的に入り混じっているのが地域です。

同質的で閉じた場にいる子どもや若者が、地域に解き放たれ、居場所で多様な経験や関係性を創出するコミュニケーションができた時、居場所は、子どもや若者の生活の場であり、地域の文化を認識し享受する場であり、経験と関係性を広げることができる場になるでしょう。



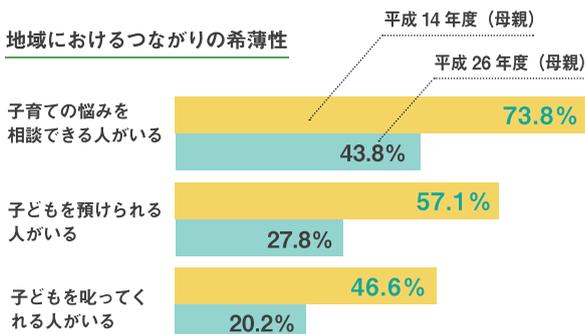
参考：平成26年3月 神奈川県青少年問題協議会報告書

### 親子を取り巻く環境

#### ① 親の孤立と子育てについてのプレッシャー

現代社会は、親同士の地域における直接的な人との関係性が希薄な中、周囲との比較や多すぎる情報により、我が子の長所や個性を認めにくく、子どもとの付き合い方がわからず、自信をもって子育てに向き合えない親が増えています。一方、「親がきちんと子どもを育てなければならぬ」という親としての重圧感が高く、地域で我が子に、目を向け、見守ってくれる人や親の悩みを受け止め、支えてくれる身近な地域の人の存在を求めています。

子どもの成長を見守り、楽しむ、親同士の関係、また、地域の大人が子育てを見守り、時にはサポートもするという雰囲気が必要であり、求められています。



■子育て地域の中で子どもを通じた付き合いが減少している。

出典：(株)UFJ総合研究所「子育て支援策等に関する調査研究(厚生労働省委託)(平成14年度) 三菱UFJリサーチ&コンサルティング「子育て支援等に関する調査2014」(平成26年度)

子育てをする人にとって、地域の支えが重要だと思いますか(%)



■約9割の保護者が子育てについて地域の支えが必要だと思っている。

出典：家族と地域における子育てに関する意識調査(平成25年度 内閣府)

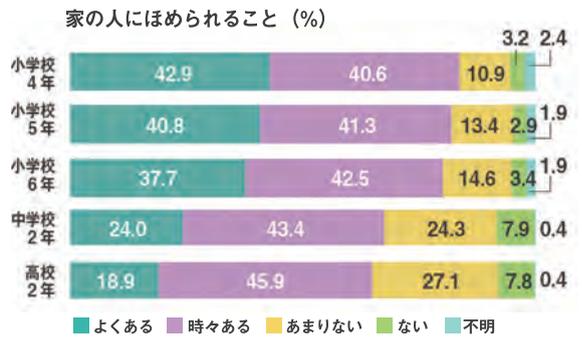
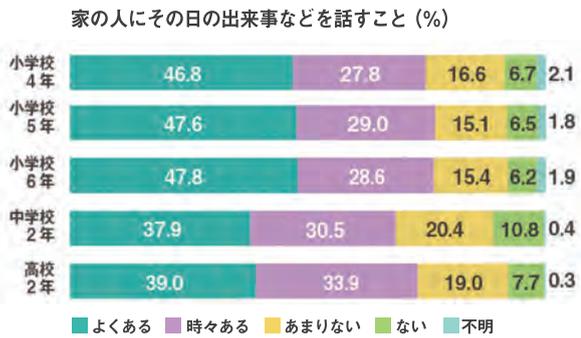
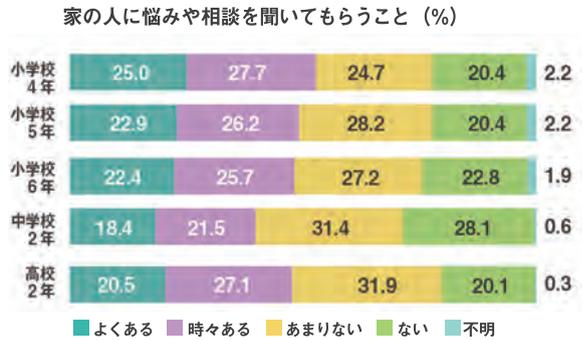
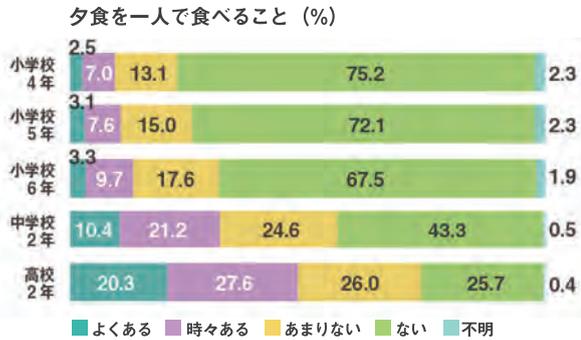


渋滞し始めた道中、  
気になりながら  
様子を見ていた。

## ② 家庭内のコミュニケーションも不足

進む少子化・核家族化の中で、朝起きたら、父親は会社に出勤して常に不在。また共働きやひとり親家庭は、子どもと向き合う時間が思うように取れず、子育てに悩みが尽きない。

このような家族形態の中で、親子ともに多忙で、関わる時間が短いため対話が少なく、コミュニケーション不足になりがちです。子どもと向き合う時間がようやくできて対話にならず、子どものことで気になることを親が一方向的に、口や手を出し干渉するなど、子どもの自立や主体性を伸ばす関わりとは異なる対応になってしまうことも。



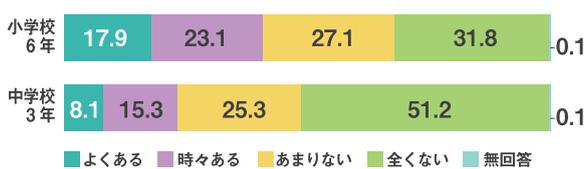
出典：青少年の体験活動等に関する実態調査（平成26年 国立青少年教育振興機構）

## ③ 子どもも地域とのつながりが希薄

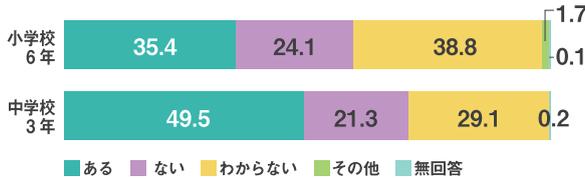
地域社会でのボランティア活動への参加や、地域の大人との関わりについての調査結果を見ると、地域で役割を持って活動したり、家族以外の世代の異なる人との交流の機会を持つ子どもは決して多くありません。

他者との関わりの幅が狭くなる中、さまざまな生活経験を積む機会が乏しくなり、自立や社会性という面で弱さを持つ子どもが増えていくことが懸念されます。

地域の大人（学校や塾・習い事の先生を除く）に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがありますか (%)



地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか



出典：平成29年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）



### 親も子ども不安や悩みを抱えて…

現代の地域社会は、都市化・核家族化が進み、職住一体の生活共同体とは異なる、職住分離の消費生活優先の地域となり、住民同士が支え合う関係を失い、親子や家族が地域から孤立する傾向にあります。

また、自分の家庭の中の状態を外の人に見せたり、聞かせたりすることに、恥ずかしさや抵抗感を持つなど、地域関係は希薄で、家庭外の人とのコミュニケーションは少なく、信頼関係や助け合いの基盤ともなる関係も築かれにくくなっています。

右表は調査年度は異なりますが、親に対し、子育てについての不安や悩み、中学生に対し、悩みや心配事について調査を行った結果です。

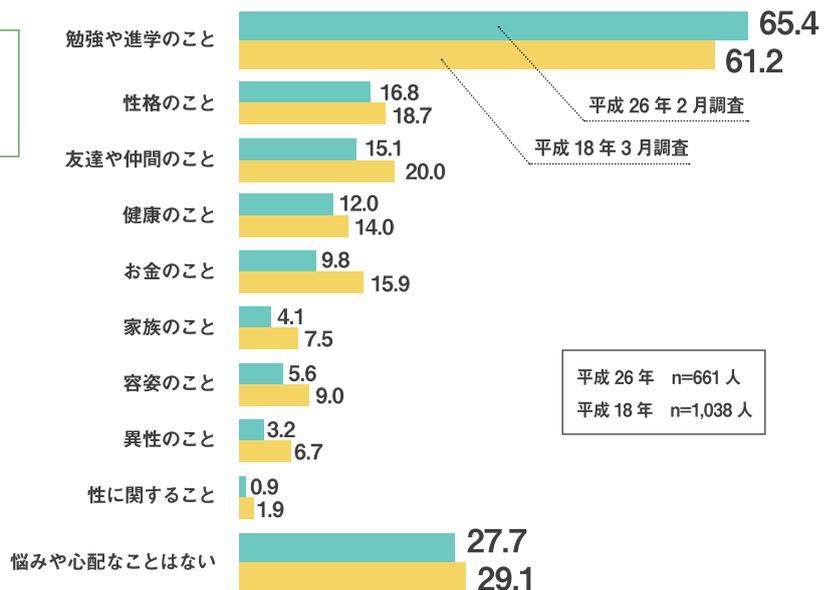
親も子どもも悩みや不安を抱えている状況は変わりません。人は、トラブルやリスクを、自ら解決・処理できるよう経験を積むことも大切ですが、他者との多様な関わり合いの中で学ぶことも重要です。そのような学びの機会が乏しいためにデリケートで傷付きやすい子ども・若者や、知識はあるけれど、自立と社会性という面で弱く、ひきこもりや不登校を含め、社会に出たくないという子ども・若者も多くなります。

子育てについての不安や悩み（複数回答） (%)

不安や悩みの種類	平成 16 年 2004 年	平成 21 年 2009 年
子どものしつけに関すること	52.3	53.4
子どもの健康に関すること	30.9	33.5
子どもの勉強や進学に関すること	54.8	56.5
子どもの就職に関すること	16.4	22.1
子どもの性格や癖に関すること	40.5	44.5
子どもの暴力や非行に関すること	5.1	6.5
子どものいじめに関すること	11.2	14.2
子どもの友人に関すること	17.9	21.5
子どもの性に関すること	7.4	7.9
子どもが保育園や幼稚園、学校に行くのを嫌がること	6.3	6.9
子どもの育て方に自信が持てないこと	21.4	21.4
子どものことに家族が協力してくれないこと	8.3	10.0
家の近所の環境がよくないこと	6.3	5.3
その他	0.9	1.2
特に不安や悩みはない	16.4	5.9

出典：平成 21 年度全国家庭児童調査（厚生労働省）

あなたは、悩みや心配なことがありますか (%)  
(中学生のみ・複数回答)



出典：小学生・中学生の意識に関する調査（平成 25 年度 内閣府）

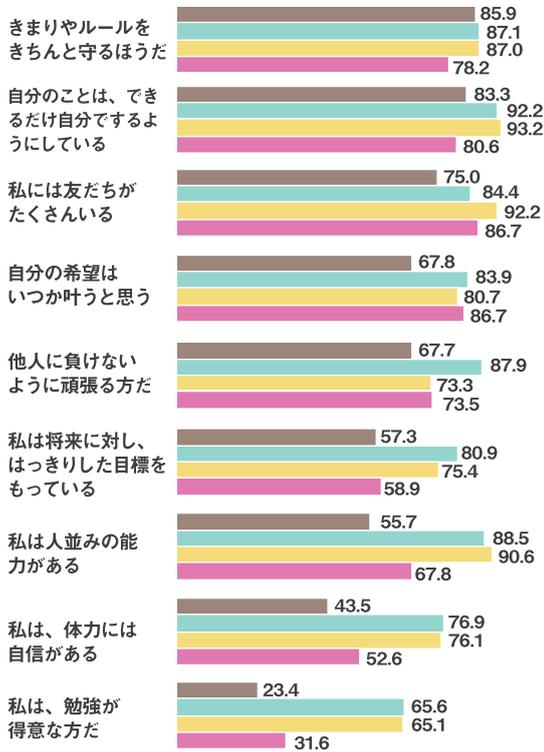
「どうしたの？」  
「気になったので、  
とそっと声をかけてみた。」



## 日本の子ども・若者は自己肯定感が低い!?

### 自分自身についての考え（ポジティブな項目のみ）（%）

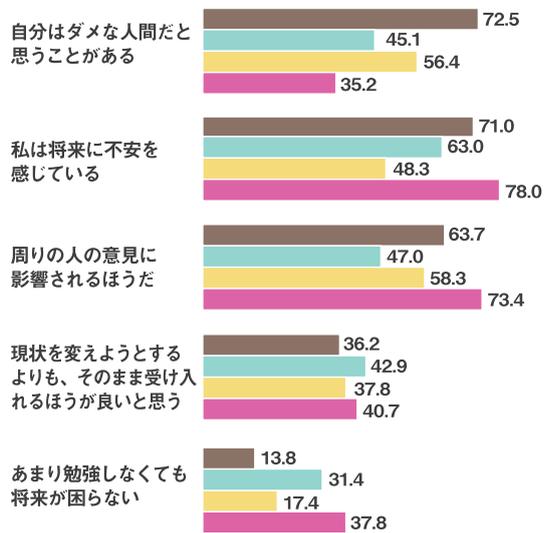
（「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合）



日本・米国・中国・韓国の高校1年～3年生に、ポジティブな項目9項目とネガティブな項目5項目を併せて尋ねています。日本の高校生は「私は人並みの能力がある」「自分は体力には自信がある」「自分の希望はいつか叶うと思う」という問いに対して、「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した人の割合が4か国中最も低くなっています。一方、「自分はダメな人間だと思うことがある」の問いに対して「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した人の割合が高く、米中韓を大きく上回っています。

### 自分自身についての考え（ネガティブな項目のみ）（%）

（「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者の割合）



出典：高校生の生活と意識に関する調査（平成27年 国立青少年教育振興機構）



## 子ども・若者にとっての育ちの場「居場所」に求められる対話（コミュニケーション）

### 地域は子どもの生活の場

地域は、子どもや若者のコミュニケーションチャンネルを多元的にし、生きる力を身に付ける、日常性のある生活の場。

多様な関係や経験を重ねる中で、子どもや若者が「この地域に生きていることは楽しい!」と思うようになることが理想です。

子育てに、親である自分に不安や不安全感を持つ人にとっても、地域に自らの子どもの顔や名前を知り、親しみを持って接してくれる人がいることは、大きな自信につながるでしょう。また、親が普段、子どもに対して言っていることを追認したり、他にもいろいろな見方があることを伝えてくれたりする第三者的な役割を果たす人の存在も支えとなるでしょう。

### 地域は学びの場

地域が持つ、特色・特性やさまざまな関係性というダイナミックな機能を引き出すことができたなら、子どもや若者は、さまざまな形で学び・気づき・成長・向上していくことができるでしょう。

地域の居場所での学びは、知識や技術を獲得することではなく、意識や行動を変えることを意味しています。無限の可能性を持った居場所での学びの豊かさは、場における対話（コミュニケーション）の豊かさにも大きく左右されるのではないのでしょうか。

### 地域は多様な関係の宝庫

子どもは、もっと自由に、いろいろな人と関係性をつくることで、自ら学び、自分や社会のための価値をつくりだしていけます。子ども・若者は、同じ世代の仲間、親子、地域の人たちとの間に個別の信頼関係を築き、多種多様なコミュニケーションを通して自ら成長していく存在であるという認識を広げ、地域の居場所には、それを実現する環境をつくっていくことが求められています。

参考：神奈川県青少年問題協議会 平成26年3月報告書

しゃくり上げるように、  
更に泣き出した。



# 君は君、我は我なり、 されど仲良き

## —居場所における関係づくり—

子どもや若者たちの居場所づくりや、その交流について考える時、ぼくには忘れられない記憶がある。

横浜にあるドヤ街、寿生活館の2階を子ども達の場にするため、職員として採用されたぼくは、その空間を子ども達の遊び場とするため宣伝チラシを作って配って廻った。

ところが商店街や公園には集まってくるのに寿生活館には誰一人やってこない。

しかたなく公園に来ている子ども達にどうして来ないのかと聴いてみた。すると「あそこには大人がいて見てるんだろ。学校みたいで行きたくないよ」と言うのだ。

寿町のほとんどの子は学校には行きたがらず、生活館も学校のように管理される場だと感じていたのだ。

ではどういう場だったら行くのか。

聴いてみると「大人がいないこと。自由に何でもできること。大人でも若い女の人ならいい。何か食べるものがあればもっといい」と言うのであった。

そこで市内にある大学の女子大生と街のオバサン達に声をかけ、簡単に作れる食べものもある自由な

場として子ども達に開放した。

すると、子ども達はのぞきに來るようになり、数日後には子どもの数も増え、自分につき合ってくれる人を求めるようになった。

子ども達は、自分につき合ってくれる人、若い人を求めているのだということがハッキリと見えてきたのであった。

子どもや若者の居場所づくりを考える時、まずその当事者が何を求めているのか、何に関心があるのかを知り、受けとめることが基本なのだと感じた瞬間であった。

先日、公立高校の定時制で生徒に話をしてほしいと頼まれ、話し終わった後、自由に感想を書いてくれるというので、名前を書いてくれたら必ず返事を書くこと約束をした。

その結果、ほぼ全員からビッシリと書かれた感想文が届けられた。

約束通り、ぼくは全ての生徒に返信を書いたのだが、そこにはプライベートな悩みや将来への不安、人間関係へのつらさなどが赤裸々に書かれていて驚かされた。

10代の若者たちは、本当に苦しみ困っていること、考えていることを誰かに聴いてほしいと思っているのだという切実がヒシヒシと感じられたのだった。

しばらくの間、ぼくは沖縄で暮らしてきたのだが、戦争やその後の経済不安の中で暮らしてきた人々から「人間が生きている意味、その本質」について学

すぐに聞き出すのも  
難しいと思ったので黙った。



沖縄大学  
名誉教授  
加藤 彰彦さん

AKIHIKO kato



PROFILE

小学校教諭、横浜市立寿生活館（ソーシャルワーカー）、児童相談所（児童福祉司）を経て、1994年より横浜市立大学国際文化学部人間科学科教授。2002年からは沖縄大学人文学部福祉文化科学科教授、子ども文化学科教授を歴任、2010年に沖縄大学学長に就任。2013年に沖縄大学を退官され、現在は、神奈川に拠点を置きつつ、沖縄でも精力的にご活躍中。「野本三吉」のペンネームで著書多数。

ぶことが多かった。

そして、人間の生きる目的について一つの結論を得たという気がしている。

人間の生きる目的には大きく二つある。

一つは文字通り生きること。特に生きることが困難になった時、生き抜いていくこと。

一人では生きれない時、他の人の力を借りても人は生き抜いていかなばならない。

つまり、他の人と共に生きること。それが生き抜くための本質なのだ気付かされた。

もう一つは人間が生き抜くためには、子どもを産み育てること。

これが最も基本的なものだと気付かされた。

もし子どもが生まれず育たなければ、文字通り人類の未来はないことになる。

そして子育ての基本は、生き抜く力をつけて育てられること。つまり仲間と共に生きていく力を身につけるということになる。

人間が厳しい状況の中でも生き抜くためには、他の人々との関係をつくり力を合わせる事がどうしても必要だということである。

沖縄ではこれを基本にして厳しい戦後を生き抜いてきたのであった。

では人との関係をつくるとはどういうことか。どんな人にも気になること、関心を持っていることが必ずある。

それが他の人と共有できたとすれば、それは本当

にうれしいに違いない。

したがって、自分に関心を持ってくれる人がいたらホッとすし、関係も深まる。

そしてもし、相互に関心のあることへの共鳴が深まると一層信頼感は深まっていく。

その人のことがまるで自分のことのように思えるという相互関係が芽生えてくる。

コミュニケーションの基本は、相手の話を聴いて共感すること、耳を傾けること。

しかし、話を聴き、受けとめることはできても、結論はあくまでも本人(当事者)が決めていくことになる。

それが人間関係の基本であり、相互関係の本質でもあることも忘れてはいけない。

そのことが理解できれば「君は君、我は我なり、されど仲良き」というかつての地域共同体「新しき村」の理念とも重なってくる。

これからの社会で生き抜いていくためには、それぞれの個性を認めつつ、互いの関心、課題、希望を共有していくという新たな関係づくりが、これからの居場所づくりに求められているとぼくは思っている。

その後も、  
子どもは泣き続けていた。





子ども・若者が社会で  
生き抜く力を育むために

## 私たちが目指す 居場所での対話

子ども・若者の多様な居場所を運営する方々に、どんな対話を目指し、どんな姿勢で子どもや若者たちと向き合っているのか、伺いました。「社会で生き抜くチカラを育む」居場所の究極の目的は、そこにありながら、訪れる子どもや若者一人ひとりを深く温かな眼差しで迎え、一人ひとりに寄り添い、時には大人の「ホンキ」を子ども・若者に伝えながら、時間と空間を共有すること。

子どもや若者は、その体験を通して自分の思いを言葉にするチカラを養い、より豊かな対話の場の主役になっていきます。

居場所は奥が深い。居場所での対話は、子どもと大人の人間力が支えています。

しばらく様子を見ていたが、やはり気になったので



### 子どものSOSをキャッチするアンテナを持つ

「(特非) フリースペースたまりば」では、学校や家庭、地域に居場所を見出せない子ども・若者たちの居場所を運営しています。そこで出会う子どもたちから、彼らは困っていること、つらい、嫌だと感じていることを自ら発信しづらく、つらければつらいほど「助けて」と言葉にできないということに気付かされます。

さまざまな居場所の取り組みがありますが、共通しているのは「私の思いを聴いてくれる」「そのままの私でいられる」こと。その居場所に関わる大人が感度の良いアンテナを持っていると、言葉にならないSOSをキャッチすることができます。

でも「あなたの話を聴いてあげる。助けてあげる」と、強く「支援臭」を放つ大人に子どもは近寄りません。さりげなくそばにいて、話し掛けやすいような隙を作る。あるいは、料理やたき火など、何らかの動作やプロセスを通じてコミュニケーションを取る。そうした時に子どもは不意に思いを語ることがあり、それを逃さないアンテナが必要です。

### 問題行動はSOSの発信

～「困った子」は「困っている子」～

子どもは、暴言や暴力、物を壊すなど、いわゆる問題行動で「私を見て」「助けて」とSOSを発信することがあります。それに対し「指導しなくては」という関わりや、「周りに迷惑を掛けるから出入禁止」といった排除ではなく、「どうしてこのような行動をするのだろう」と、その背景に思いを巡らせ、子どもが小さな失敗を安心して積み重ねていけるよう、寄り添うことが大切です。「困った子」は実は「困っている子」であり、そうした子どもたちの居場所になるには、彼らの問題行動に関わり続ける覚悟を持った大人になれるかが求められます。

問題行動に私たち大人も感情が揺さぶられます。その時に必要なのが「怒りのコントロール」です。怒りを感じたときには「なぜ私はこの子を許せないと

不登校の子ども、ひきこもりの若者の居場所、プレイパーク、学習支援



## 特定非営利活動法人 フリースペースたまりば

理事長 西野 博之さん HIROYUKI nishino

川崎市高津区千年 435-10  
TEL 044-833-7562 URL <http://www.tamariba.org>

思っているのか」を考え、世間の常識、価値観にとらわれていないか「私の物差し」を疑います。周囲が受け流せているのであれば、自分の物差しを変えることでこの子を受け入れられるかもしれないと気付く。そのように感情のコントロールに気を付けながら、この子の思いを受け止めようとそばにすることで、子どもが思いを語りやすい場になっていきます。

## 目の前の子どもから学び、 気付き、互いが豊かになる

### 子どもから気付かされる「思い込み」

人と関わるのが苦手な少年がフリースペースに来て、1年くらい誰とも話していない状態が続いていました。ある日、その少年に動きの大きい子が近づき、急に少年の手を取ってぐるぐると回しました。

スタッフは「やめなさい」と慌てて止めに入り、振り回された少年に「嫌な時は嫌だと言っていいんだよ」と伝えて、傷付いたかもしれない彼に寄り添おうとしました。

でもその少年は「あの子が僕の手をとって振り回したのは、多分、僕が誰とも話をしていないことを気にして、周りの人に“ここにこの子がいるよ”と伝えるためだったのではないかと思います。僕はあの子に出会って、とても嬉しかった。優しい人なのではないかと思います」と言ったのです。

スタッフ全員、少年の言葉にはっとしました。自分の物差しがまだまだ尺度の多様な物差しになっていないこと—「きっとこの子は傷付いている。嫌な思いをした」ということが思い込みであったと気付かされたのです。

長い間、子どもと関わっていても、こうした瞬間はまだあります。

### 関わりが難しいほど人も場も豊かになる 居場所のおもしろさ

子どもが抱える問題だけを見るとその子の困った点だけに目が行ってしまいますが「この子が最も輝くことは何だろう」と、その子の素敵なところに光を当てるまなざしに変える。そして「私の感情をどのようにコントロールすると、その子と楽しく過ごせるだろうか」と意識を変えていくと、その子の魅力が見えてきて、コミュニケーションも取れるようになってきます。

居場所に困難を抱えた子が来るほど、そこはおもしろい場になっていきます。それは「どうしたらこの子とコミュニケーションが取れるだろう」と悩みもがくプロセスを通し、「私」の他者を理解する視点や裾野が広がり、居場所も成長できるからです。

隣に移って、  
「何か困っているのなら  
言っただらんと  
話しかけた。」



さまざまな背景により課題を抱えざるを得なかった生徒が多く入学する高校で、校内居場所カフェという活動を行い、中退や進路未決定の予防支援に取り組んでいます。

コンセプトは、これまでの日常生活で得ることのできなかったヒト・モノ・コトを通じた文化資本の提供により、社会関係資本への接続の可能性を高め、経済的に自立していける基盤づくりや、何かあった時に早期支援を可能にすることを目的としています。

運営には多くの方々が関わっており、私たちの

## いろんな大人がいることが居場所では大事

に強く意識してもらっていることは、先生でも親でもない第三の大人であるということ。だから、指導的にはならず支援的に考え行動してほしい。そして、お手本になる必要はなく、大人のサンプル（見本）としてカフェにいてくれればいいということをお伝えします。

### 高校生の就労支援、相談、居場所



#### 特定非営利活動法人 パノラマ

代表理事 石井 正宏さん MASAHIRO ishii

横浜市青葉区桜台 25-1 桜台ビレジコリドール R1  
TEL 045-479-5996 URL <http://npo-panorama.com>

目指す居場所づくりに貢献していただいています。「居場所」という漠然としたキーワードの下、私たちがどのようにチームとして機能できるようにしているのか、ということについて書いてみたいと思います。

まず、教師に対しては、私たちは教師の補助的役割ではなく、専門性＝アプローチの違いを理解してもらいます。専門性の違いは情報の収集の質の違いに表れます。毎回の振り返りで、私たちが収集した情報を共有することで、教師は徐々に理解し、役割の違う専門家が同じミッションに向かってカフェを運営しているというムードが生まれます。

そして、ボランティアさん

支援的というのは分かりにくいかもしれませんが、教える人と教わる人という役割設定を外すことだと思います。この設定が外れた場がサードプレイスであり、役割のシャッフルが生まれる場です。生徒が教える人になり、大人が教わる場面が生まれる。そんな瞬間が生まれる場にボランティアさんが主体的に関わることで、それを尊重する雰囲気大切にしています。

カフェにいる大人をマスターである自分が信用している、という態度は生徒たちの暗黙の安心感になると思います。信用というのは、高いレベルの質の保証ではなく、コンプライアンスが守られていれば、ちょっとオドオドした“心配になる大人”がいてもいいという前提から生まれます。

みんながキラキラしている必要なんかなく、いろんな大人がいることが居場所では大事。あなたはその一人に十分になれる！という受け入れ感がチーム感になると思います。ボランティアさんとの対話の背景には、いつもこんな思いを持っています。



塾の帰りらしい。

しゃくり上げる声は止まらないが、その間に語った事情はこうだった。

いつの頃からか、人と話をしなくてもある程度は生活ができる社会になっている。買い物や改札もピッで終わる。家族のだんらんはTVやスマホに奪われ、LINEやメールは短いほどいいらしい。絵文字やスタンプが感情を代弁してくれる。あいさつも会釈だけ。

会話はできるが、対話にならない。意見を言うことが攻撃と捉えられ、戦闘モードとなり時に『炎上』と呼ばれる。

コミュニケーション(対話)は、相手の言っていることを受け止め、認めることから始まるし、お互

か同じ方向を見つめて(プレイパークではそれが火や遊びだったりする)話すときのほうが話しやすいかもしれない。関係性の中で出てくるつづやきをキャッチし、受け止める。決して否定せず、ありのままを受け止め評価しない。物事には答えが出ないこともあるけれど、気持ちや思考を整えることですっきりすることもたくさんあることを体験してほしい。

以前、プレイパークの場で車座になって誰でも参加できる対話の時間を設けたことがある。みんなで作りたい場だったから、プレイパークの理念

### 6か所で子ども若者の交流、居場所、ネットワークづくり



## プレイパーク 遊 Being ♡あしがら

代表 山崎 由恵さん YOSHIE yamazaki

神奈川県西園域および二宮町

URL <https://www.facebook.com/groups/228858144149908/>

## 気持ちや思考を整えることで すっきりすることもたくさんある

いが自分の意見を持っていることで成り立つ。最近、自分の思いを言葉にするチカラが未熟な子どもが多いと感じる。

「すげえ。わかんねえ。さあ。しらねえ。ムカつく。イラつく…」子どもは自分の感情を豊かに表現できるボキャブラリーが育てられていない。間違えてもいいから『使ってみる』のが言葉であり、豊かなコミュニケーションだと思うのに。

さて、子どもたちは時に容赦ない対立やけんかを生む。沸点の低い子は感情を爆発させて終わり。でも反対に、感情を出せずに我慢して嫌な思いを抱え込んでいる子どもも多い。そんな子どもたちに根気よく丁寧に接していると、素直な自分の思いや気持ちにたどり着ける力を子どもたちは持っていることに気付かされる。面と向かって話すよりも、何

や目線を合わせる時間とした。遊んでいた子どもたちが自然とその輪に入り、話を聞いていた。もちろん「子どもはあっち行ってな」などと排除することはしないし、「何か意見を」なんて無粋なこともしない。何か言いたげな子がいたら水を向けるだけ。大人が真剣に対話する姿を見て、子どもたちは大人の本気を感じるだろうし、興味を持つ子がいるかもしれない。現に、高校受験を目前に控えた男子が帰りにこんなことを言った。

「オレ。高校生になったら、ここのスタッフになってもいい？」こういううれしい瞬間があるから、プレイパークはやめられない。

いつも乗る  
循環バスだったのだが、  
間違っ  
て  
逆回りに乗ってしまった。



早いもので「くすのき広場」(以下、くすのき)を立ち上げて満4年が来ようとしております。ここまで来れたのは多くの人々の協力があったからです。あまりにも子どもの育つ環境が悪く何とかしなければならぬと思った大人たちが力を合わせて活動してきました。

ボランティアスタッフをどうするかが最初の課題でした。幸いに私が民生委員をしておりましたので当初大沢地区の民生委員の全面的な応援いただき、またホームページで趣旨を発信し続け、さまざまな分野の方が集まり、立ち上げの会議等で意見交換

## 大人同士のコミュニケーションの豊かさが居心地のよい場をつくる

に婦人たちの元気のもとになればと念じています。

スタッフの中に市議員の方がおられますが子どもの視線に合わせ、寄り添ってくれています。ルポライターの方は外部のボランティアへつないでくれ、おかげで大学生や教授も参加してくれています。

また、地域包括支援センターの職員は忙しい中、



地域の子ども若者の居場所、学習支援、たまり場

### くすのき広場

代表 吉澤 肇さん HAJIME yoshizawa

相模原市緑区 市営上九沢団地内公共スペース (多目的室)

TEL 042-762-4568 (代表) URL <https://www.facebook.com/kusunikihiroba/>

するうちに団地外の人や団体協力の輪が広がり、予想以上にスタート時期より充実した活動ができています。

その中でなかなか現地スタッフが育たず苦労しましたが、50代の男性2人が熱心に取り組んでくれはじめ、先行きに展望が開いているところです。子どもたちにおにぎりを作る「おにぎり隊」の婦人たちは開設以来ほぼ同じメンバーで楽しく活動してくれています。普段はこのメンバーで買い物や日帰り観光、観劇など楽しんでおり、たまには私もカバン持ちをします。このくすのきの活動が縁でさらに仲良くなった模様です。高齢の婦人方にも人のた

めに役に立つという喜びを感じてもらっています。子ども達に関わり、子どもたちの発言に驚き、成長に喜び、まるで我が孫を見る目になっているのがしばしば見受けられます。子どもたちとの触れ合いがさら

子どもたちととことん遊んでくれます。社協の方も常に見てくれてアドバイスしてくれます。それぞれの人が自分の経験、役割を認識され、それをくすのきに生かしてもらい、一人ひとりが持っている力を出していただくとこんなに良いものになるのかと実感しております。とにかく外部に発信し続ける事です。

子どもたちが帰った後、できる限り反省会を行い話し合います。情報の共有が原則です。今日起きたことを皆で述べ、意思統一し、今後に生かします。時に喧々諤々の論争もあります。それも皆で同じ方向に向かって行くために必要な事です。スタッフは外部の方が多く、市外から来ておられる方もいらっしゃいます。夜遅くまで参加していただけることにいつも心から感謝している次第です。

私もスタッフの皆さんから学ばせてもらっています。皆さんの意見を十分に聴き何が今必要かを常に考えるようにしています。現在、くすのきが活動しているのは外部スタッフのおかげと感謝、感謝です。

お母さんがバス停に迎えに来ている。





## 児童養護施設等の若者たちの存在をどう企業へ発信しているか

一言で言うと、育てがいのある人材をじっくり育てませんか、という提案です。

顕在化しているスキルや能力は不十分ではあるが、18歳という若さで親を頼れずに働くという境遇から生み出される高い自立心や就労意欲は、本人たちならではの強みです。特に日本の中小企業は学歴やスキルよりも人物重視の採用スタイルであることが多く、また、昨今の少子化等の流れか

このスタンスを徹底して接します。

そして、自分らしい働き方を実現するために、たくさんの選択肢の中から自分の進路を選ぶ権利を持っていることをしっかり伝え、その上で、しっかりと自身の進路を「自己決定」することが大切であるということを伝えます。フェアスタートは児童養護施設等の中高生たちに対して、会社見学や就労

## 前向きなコミュニケーションが 生み出す WIN-WIN の関係

### 児童養護施設等の若者たちの就労支援



#### 株式会社フェアスタート 特定非営利活動法人フェアスタートサポート

代表 永岡 鉄平さん TEPPEI nagaoka

横浜市中区北仲通 3-33 関内フューチャーセンター 214  
TEL 045-319-4675 FAX 045-319-4676 URL <http://fair-start.co.jp/>

らくる人手不足の課題も合わせ、児童養護施設等の若者たちを採用したいと興味を示す企業は増えています。養育環境に恵まれなかった「かわいそう」な人材を雇ってあげるのではなく、そうした環境で育ったからこそその強みを秘めた「もったいない」人材をぜひ育ててみたい、こうした価値観を企業の世界に浸透させる努力をしています。

企業も既存の社員の生活を守るため、お情けや慈善で人を雇用するには限界があります。しかし、こうした前向きな発信をすることで、何年も掛けてじっくりと育てれば貴重な幹部社員になってくれるのではないかと期待を抱き、ぜひ投資しようと思えるようになります。

### 施設の若者たちとどうコミュニケーションをとっているのか

また、若者たちとのコミュニケーションにおいても、同様です。あなたたちは決して「かわいそう」な人ではなく、貴重な可能性を秘めた人材である、

体験の機会提供を随時行っていますが、こうした機会提供も本人たちがどこに見学や体験に行きたいのか、しっかり自身で考え、決定するトレーニングの機会にもなっていると考えています。実際の就職をあっせんする際も同様に、私たちから就職先候補を強く本人たちへ推薦することはしません。意思決定の主人公は若者たち本人ですから、本人がここで働いてみたい、と意思決定するまでじっくりと寄り添います。

前向きなスタンスで雇用を受け入れる企業、きちんと自己決定し前向きな姿勢で入社する若者たち、この双方の前向きさが、結果として若者たちの自分らしい就職を実現するのだと思います。引き続き、この姿勢を大切にし、活動に努めてまいりたいと思います。

なのに、このバスだと  
1時間以上も  
遅くなってしまう。



## コミュニケーションすることに臆病？な人々

高齢者の一部を除いて、どの世代も、自分の考えに自信を持ってない、否定をされてしまうのではないかという思いから自分自身の考えはとりあえず横におき、他の人の反応を気にしながらコミュニケーションをとる、面倒なことは無かったことにしてしまう傾向にあると思います。

ほんそん子ども食堂「いただきます」を訪れる保護者の特徴は、自分より仲間を優先するために本音で話ができにくいように見えます。自分の考えを話す時も、あらかじめ答えを予想しないと話ができない、自分の考えに自信が持てない。自分の評

シオンとしては、調理には当事者はほとんど入ってこないで、この2～3時間の時間がコミュニケーションの場となっています。活動内容の事、気になる親子の事などが話題になります。それぞれの強みを生かした活動をしていただけるようにこの場で話をしています。

外部とのネットワークは、市役所の子育て支援課、家庭児童相談室、市社協、地区社協、福祉相談室、保健所などを持っています。インフォーマルなどここでは、生活クラブ生協運動グループ、お借りしている教会、スタッフやボランティアが活動しているフィールドなどとも連携をしています。ボランティアが主体的に関われるようなコミュニケーションを

子どもや家族の居場所づくり、みんなの食堂

## さまざまなボランティアが いきいきと活動できる 居場所に



### 地域のお茶の間研究所 さろんどて

代表 早川 仁美さん HITOMI hayakawa

日本ホーリネス教団茅ヶ崎教会内  
URL <https://www.sarondote.com/wp/>

価ではなく、他人の評価を気にして生きているように見えます。だからこそ、この場では安心して話ができ、いつでも受け止める姿勢が大切だと思います。

## 担い手同士のコミュニケーションは情報と知識の共有に

もともと生協の活動でつながっていたボランティアですが、その方々がさらに地域で民生委員や主任児童委員の活動、介護職、看護職、保育職など専門職のスキル持って子ども食堂の活動に参加してくれています。地域の状況をよく知り、子ども・若者を取り巻く幅広い見地を持った方々が担い手となっています。内部のコミュニケー

目指しています。

子ども食堂のボランティアの参加動機はさまざまです。ボランティアが一層、思いを実現できるよう主催者である私たちが狭める事の無いように心掛けています。

## 障害のあるお子さんを育てるお母さんにもママ友やボランティアができています

私たちが子ども食堂は子ども支援というよりは親支援の部分が大きいので、事例的には親子への支援になります。自閉症スペクトラムの小学生の親子は（もっと小さい頃よりつながっていますが）子ども食堂ができてからは毎回通って来るので、発達障害について情報を伝えながら、孤立しがちな保護者の話を聞いてきました。話ができ、共感してくれる人がいて、多くの大人に見守られながら親子が孤立しないで成長しているように思います。

待っているお母さんは、絶対に心配する。そう言って泣くのだった。



## 第1部 講演

## 第2部 ワールドカフェ

## 第3部 シンポジウム

## 大人が子どもや若者と 対話すること

発見と創造につながる  
豊かなコミュニケーション  
を持つことのススメ

慶應義塾大学特任准教授  
(株) NewYouth 代表取締役

**若新 雄純さん**

### 答えが一つではない時代を生きる

僕が研究しているのは「ゆるいコミュニケーション」で、重要なテーマは「答えはない」ということ。

これまでは大人になって、こうしていけば人並みの人生を送れるのではというモデルがありました。でも価値感が多様化して「答えはこれです」と一つを挙げられなくなっている今、そのモデルも怪しくなっています。

僕は今、若者たちが答えを見つけるために、絶えず試行錯誤する状態をどうつくるかを研究しています。

実は多くの人が「こうすると確実に」ということをしたいのです。でも僕は「それは意味がないんじゃないか」とか、「分からないことがたくさんある」ということを探っていきながら答えを見つけることが大切だと考えています。

### コップは満ちているけれど…

#### 今時の若者とのコミュニケーション

うちの親父は1950年生まれで、教員でした。初任給は4万円くらいで、校長先生になった時のお給料は50万円くらい。若い頃に借金をして家を購入しました。1980年代のトヨタのCM「いつかはクラウン」のとおり、親父は校長先生の内示をもらった日にクラウンを購入。その後、退職金の一部で我が家の蔵を700万円で直し「この蔵を直してワシの人生は完成した。いつでも死ぬ」と喜んでいました。

親父の若い頃は、空のコップを満杯にするイメー



日本の実業家、プロデューサー、研究者。ニート（若年失業・無職者）が全員取締役就任して設立した「NEET 株式会社」の発起人・代表取締役会長、福井県鯖江市の女子高生によるまちづくりプロジェクト「鯖江市役所 JK 課」のプロデューサーなどを兼任。著書『創造的脱力～かたい社会に変化をつくる、ゆるいコミュニケーション論』（光文社新書、2015年）

ジ。欲しいものを手に入れようとエネルギーでした。でも今の若者の「満たされたい」というエネルギーは、そう単純ではないと思っています。

僕が関わる多くのニートには帰れる家があり、食べる物もある。そういう風にある程度コップが最初から満たされているとより新しいものを求めていき、今度は自分が生きている意味や可能性を探そうとします。それは新しい領域に広がっていき、コップから水がこぼれていくようなものと思います。

コップからこぼれた水が床にどんな模様をつくるか事前に分かる人はいません。それが生きていかなければならない人生の面白さであり、難しさだと思います。「どういう結果がゴールで幸せかを本人にも分からないけど何かを求めている」そういう若者と付き合っていかなければならない。それが僕らが若い人たちとすべきコミュニケーションです。

### おしゃべりと試行錯誤で「居てもいい場所」ができる～「NEET 株式会社」の取り組みから～

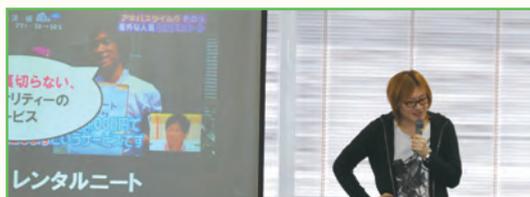
僕は120人全員がニートで役員の子会社の代表をしています。彼らが何を考え、どうなりたいたいのか全く分からなかったので、彼らと共に考え、探そうと始めました。プランも成功の基準もない。そのためすごい批判されました。



僕はここでずっと彼らとしゃべっています。僕とも違いが山ほどあるけど、何が楽しいのかわからないことにも耳を傾けないと、彼らとの関係が生まれません。ある時、彼らは気付くのです。「若新は俺らに何も指示をしない。どうしたら成功するかも分かっていない。でも会社を作ってくれたし、何かする時には応援してくれる。ならば自分たちで考えてみよう」と。そして彼らの「居てもいい場所」ができるのです。「いつまでにこういう結果を出しなさい」と決めていないので、彼らのやりたいことやタイミングを見つけて動き出すことに、安心が担保されているのだと思います。

### 「個別の納得」を生むおしゃべり

NEET 株式会社を始めたころは企業から仕事を持ってくることもありましたが、うまくいかず僕が先方に謝りに行くこともありました。それを見ていたメンバーの一人が「俺たちは働いたことが無いから普通に働くことは無理なんだ」と気付き、自分たちならではの、1時間1,000円で遊ぶ「レンタルニート」というサービスを始めました。これはおしゃべりが生み出した究極のサービスで、彼らだからこその大発



明だと僕は思っています。

お客様の期待を裏切らないよう、低いクオリティのサービスを常に重視していて、依頼のメールには「だいたい何時くらいに行きます」といい加減に返す。でも実は待ち合わせ場所に時間どおりに必死に到着する。お客さんは「ちゃんと時間通りに来た」と驚き「思ったより楽しかった」と褒めてくれる。

レンタルニートでの彼の収入は月2万円くらい。「それでは意味ないじゃん」というのは、社会がそう決めたい今までの結論です。大切なのは彼自身がこれならできると納得し、取り組んでいることです。

ニートの彼らがなぜ世の中の何にもなじまず、居場所を失っているかは本人たちにも分かりません。だからじっくり彼らと話しながら一緒に探していき、その中で「こういう生き方もあるのか」と彼らと共に作っていく。僕が彼らとしゃべり続けたのは、彼ら自身が納得できる、個別の納得みたくのを一緒に探すためだったのだと思います。

### 居場所とは納得できるものを作っていく場所

少数派の人に「がんばって多数派に戻ろう。協力するよ」というのは、必ずしも彼らの幸せや答えではないし、彼らを生かすことになりません。

はみ出していると思われる人たちが、自分で納得する「無数の納得」をどう創造していけるかを僕は考えています。そしてそれが今必要とされている居場所なのではないかと思っています。

居場所は単にゆるくして何もなくて良い場なので



はなく、彼・彼女らが自分らしく納得できるものを作っていく場なのではないかなと思います。

### おしゃべりが居場所をつくる ～鯖江市役所 JK 課～

2014年、福井県鯖江市役所に女子高生によるJK課を立ち上げました。これもひどくたたかれました。理由の1つは、女子高生のJKという呼称が卑猥ということ。もう一つは「これを作ったことでどうなっていく」という計画を全く打ち出さなかったこと。

JKが何を面白いと感じ、どこに市の魅力を感じるかはやってみないと分かりません。そう答えると計画やゴールがあることを信じている人たちに「めっちゃめっちゃ怪しい」と批判されたのです。

JKはニートと同様、ずっとしゃべっています。しゃ



電話がつながり、  
母親と話せて  
一件は落着いた。

べり続ける中で、次第に彼女たちにも言いたいこと、やりたいことが出てくる。そして市役所の人たちや僕と仲良くなり、何かをやらうとするのです。

鯖江市長は「JK 課は続けますよ」と言ってくれました。JK みたいな今まで関わったことの無い若者が市役所に入ってきたことで、自分たちが変われたり、学んだりできれば良い。ニートや JK を得体のしれないものは怖いからとコントロールしたり方向づけるのではなく、我々が学んで変わるのだということ。それを覚悟できるかが重要です。

JK 課の取り組みは総務大臣賞を受賞し、高校の教科書の表紙にもなり、市は一矢を報いることになりました。JK がその場を必要とし面白いから今も続いています。大人が目指す結果に若者をあてはめたのではなく、集まってきた若者に委ねた結果なのです。

### 発見の連鎖を生む試行錯誤的対話

昔はやった「ルーズソックス」。あれは一人の女子高生が発明したのではなく、関わった人たちの対話の産物なのです。

ある JK の靴下の履き方を見た他の JK が「何それ



かわいい。私もやる」と靴下屋に行き、靴下屋は「そういうのがやっているのか」と知る。もこもこした靴下を「こういうのならあるけど」と店員が出し、JK がそういう靴下を選ぶようになり、最終的にメーカーが参入し、商品が生まれたのです。

この面白さは、靴下屋は「その履き方はダメ」ではなく「こういうのどう?」と提案し「これは微妙っす」と、お互いを尊重する対話があることです。

試行錯誤的対話は、最初はよく分からないのですが、誰かが気付いて面白くなってきて「もっとこうしよう」と連鎖していく。プランなんて持っていないし、集まってどうしたいかも分かっていません。「でも何かこの場所が必要」と、そこに参加する人たちが感じている。そして試行錯誤を繰り返しながらしゃべり続けて、「こうすれば面白いのでは」というような発見が生まれて、連鎖していくのです。



### 評価しない「安心のおしゃべり」が何より必要

安心できるというのはどういうことか。逆に言うと不安なおしゃべりとは何かということ。例えば、学校の休み時間の会話に担任の先生が入ってきて「気にしないで、聞いているだけだから」と横で聞いていたら、安心してしゃべれない。なんで担任の先生がいると不安かという、それは発言を評価されるのではないかという不安を感じるからです。大人が入ってはいけないということではありません。僕が徹底してやって



きたことは、僕自身も市役所の職員も、若者が話していることや考えていることを途中で評価したり点数をつけるようなことは絶対にしないということです。大人に評価されるようなことを言わなければならないと意識するようになると、おしゃべりが成立しません。いつまでに完成するのとか、どうなったら成功なんだとか、評価したり点数を付けたり、価値を定義づけをしないこと。そして、一緒にどうしていいかと、おしゃべりの時間を作ることが何よりも大事なのだと思います。

子どものしゃべり声も  
おさまってきた。



第1部 講演

第2部 ワールドカフェ

第3部 シンポジウム

## 今の大人・若者・子どもについて語り合おう

ファシリテーター：佐塚 玲子氏（NPO 法人よこはま地域福祉研究センター センター長）

コメンテーター：若新 雄純氏

Talk 1

大人の生きにくさを語ろう！家庭で・地域で・職場で

Talk 2

今どきの子ども・若者とコミュニケーションの難しさ

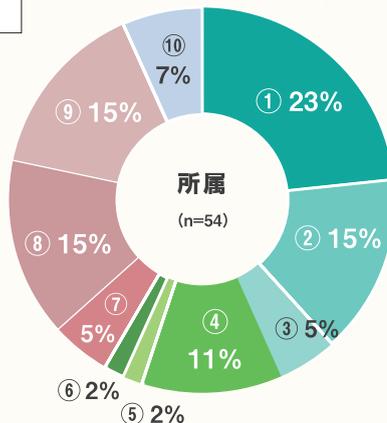
Talk 3

支えたい子ども・若者・大人像



### アンケート回答者の概要

参加者 78 名  
アンケート回答者 54 名  
(回収率 69.2%)



- ① 居場所活動
- ② 福祉施設
- ③ 地域包括支援センター
- ④ 民生委員児童委員
- ⑤ 保護司
- ⑥ 社協
- ⑦ ボランティア・市民活動
- ⑧ 行政
- ⑨ その他
- ⑩ 無回答

しかしここからのことが  
彼女らしいと思うのだ。





Talk 1



Talk 2

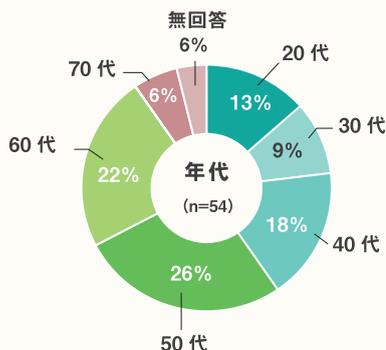
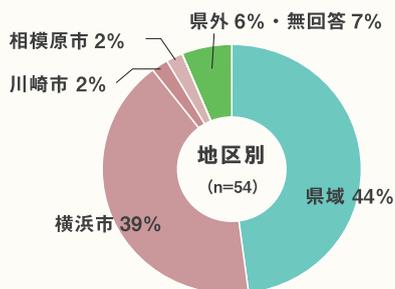


Talk 3

- ・ママ友同士のいざこざ、地域とのコミュニケーション不足で孤独を感じている。
- ・SNSのおかげで直接対話していない。
- ・責任を持つことが多くなり、ミスができない。
- ・地域で愚痴を言える相手がいない。
- ・会社の尺度を地域社会に持ち出す。
- ・新参者はなかなか発言できない。
- ・職場で人間関係を深めたいが、プライベートに踏み込めない。
- ・夫婦間で子育ての考え方が違い、トラブルに。
- ・妻として、母として、女性としてこうあるべきと期待されて生きづらかった。
- ・相手にどう見られているか考えすぎてしまう。
- ・自分の意見を言えない・伝えにくい。
- ・認められなくてもいいから否定してほしいくない。

- ・あいさつしない。
- ・話してくれない。何をしたいのかわからない。
- ・話しかけても単語で返され、話が弾まないし、本音も読めない。
- ・注意すると人格を否定されたように受け取る。ガラスのハート。
- ・大人を信用していない。信用すると依存的になる。
- ・新しい情報、ツール（パソコン、スマホ、SNS等）についていけない。
- ・他人の子を注意すると、その子が親に言うので、ものすごく気を遣う。
- ・家庭が負の情緒をめぐってあげる場所でなくなっている。
- ・電車やバスで子どもが席を譲らないなど、昔の通りにならない。
- ・昔と今の子ども・若者がそんなに変化しているのだろうか。大きな変化は無いように思うが。

- ・地域の子には誰でも来てほしい。
- ・支えたい？こちら側が決めることではない。
- ・家庭・学校の中でしんどい思をしている子（不登校、共働きの親子、貧困から進学をあきらめている子、親と上手くいかない）
- ・周りから「コワイ」と思われちゃう子
- ・障害・疾病、生きづらさを感じている子
- ・外国から来て言葉が通じず壁を感じている人
- ・どこにも所属できていない大人とその子ども
- ・リタイア後、一人で過ごしている男性
- ・先生や親以外の地域の大人とつながる場
- ・悩み・感じていることを出せる場
- ・異年齢の交流の場
- ・支えられる側と支える側を分けない居場所



第1部 講演

第2部 ワールドカフェ

第3部 シンポジウム

## 子ども・若者にとっての「居場所」とは ～居場所におけるコミュニケーション（対話）を考える～



ファシリテーター

よこはま地域福祉研究センター  
センター長  
佐塚 玲子氏

シンポジスト

沖縄大学  
名誉教授  
加藤 彰彦氏

シンポジスト

くすのき広場  
代表  
吉澤 肇氏

シンポジスト

地域のお茶の間研究所さろん  
代表  
早川 仁美氏

シンポジスト

慶應義塾大学特任准教授  
NewYouth 代表取締役  
若新 雄純氏

4人のシンポジストをお迎えして、居場所を、また、居場所でのコミュニケーションについて、お考えを伺いました。居場所の価値と可能性を改めて実感する、ご経験や研究に基づいたお話のやり取り、ご紹介します。

**加藤** 今日とはとても嬉しいです。若新さんの話を聞くことができ、また、参加の皆さんの話を聞くことができたことも。私は、小学校の教員、児童相談所のケースワーカー、横浜市の寿町での生活相談員などを経て、大学で社会福祉を教えてきました。

社会福祉について私は、「人間関係が切れて困難に直面している人たちに対して、人間関係をつなぎ直して復活させること」と思っています。私は60歳で横浜の大学を退職したのち、沖縄の大学に勤めましたが、

戦争という大きな困難を経験した沖縄の人たちは「ゆいまーる※」という、一人で行うには難しい作業を集落で助け合い協力し合う精

神で乗り越えました。

「子ども・若者の居場所」を考え・創造するとき、人間は、人間関係の中で、さまざまな影響を受けてつくられることを認識している必要があります。そしてだからこそ、居場所でのコミュニケーション（対話）が大切なのです。

若新さんの活動の中には、今日の社会にある既存概念にとらわれない豊かな対話があると思いました。

**吉澤** 私は、成人している息子が二人いるのですが、運動会も1回しか行ったことないんですよ。そんな男が、どうして今、子どもたちの居場所やっているんだろうって思うことがあります。7年前、引っ越してきた団地の中で激しく荒れた子どもたちを見て、叱っても、排除しても、問題は解決しないって思った。

でも実際、子どもたちを前にすると、どんなふうにも声を掛けたらよいかも分からなかったですよ。コミュニケーションの糸口を見つけられなかった。

地域の人、福祉関係機関の人、子どもや若者の研究をしている専門家などいろいろな人が協力してくれて、その人たちと子どもたちがいろいろに対話して、今があるんだと思っています。自慢じゃないですけど、警察

「5年生ならもう、小さい子じゃないんだから、泣いていても問題が解決しないのはわかるよね」



※ゆいまーる ユイ（結い、協働）+マール（順番）の意、順番に労力交換を行うこと、相互補助とも訳される

の人にも言われるんです「上九沢団地変わったね～」って。本当に変わったんですよ団地が、みんなのチカラで。

**佐塚** 「くすのき広場」にお邪魔したときに感じたのは、大人が楽しそうだったこと。みんな笑顔で、にぎやかなんです。そして、吉澤さんのことを信頼していて、大人同士の信頼関係もあるんだなあって思いました。

ワールドカフェ、皆さんのお話を聞いていて何か感想はありますか？

**吉澤** 子どもたちの居場所に携わっている皆さん、悩みごととは同じなんだなあって思いました。活動するには、いろいろなことしなくちゃいけないけど、子どもたちへの取り組みで一番私たちが悩むのは「子どもにどう関わるか」ではないですかね。「話し掛けてみようかな」とか「ちょっと注意しなくちゃいけないんじゃないかな」とか、今も大人たちは、いろいろな気持ちになるのだけど、子どもに「受け入れてもらえるかな」とか不安になるわけですよ。そうすると、引いてしまう。そこで「勇気」が必要なのかなと思います。私は居場所をつくらうと思ったけど、いざとなったら、どう話しかけたらよいかも分からない自分で、どうしたらいいかと考えました。それで、通学路の横断歩道で旗振りをするおじさんをしました。毎日



やっていると、顔見知りになるでしょう。それって大事ですね。大人にとっても子どもにとっても、お互いのことがだんだん分かってきて、個性があるのも分かって、自然に話し掛けられるようになるのです。

**佐塚** 早川さんは「ほんそん子ども食堂 いただきます」の代表をしていらっしゃいますが、ワールドカフェに参加されてどんな感想を持たれましたか？

**早川** 私は居場所に「こんな子どもに、若者に来てほしい」とあらかじめ想定すると、取り組みは難しくなる

んじゃないかなと思いました。確かに現代は、子どもの貧困など、いろいろな問題が顕在化していて、そういう子どもたちに来てほしい、支えなければという発想にもなるけど、そういう居場所って行きやすいでしょうか？

「いただきます」は、そもそも私自身の高校2年生の息子に不登校だった時期があって、その時私も「どうして皆学校に行っているのにうちの子だけ？」みたいに孤独に悩んだのです。「いただきます」は、子どもと保護者が自然に顔見知りになって、おしゃべりしたりできる関係づくりがしたくてつくったんです。

今回の交流会のテーマは「コミュニケーション」ですが、今時の社会は大人も生きにくい。弱音を吐ける場が無くなっているように思うのです。私にとっても「いただきます」は本音を言える、弱音を吐ける場になっている。居場所は特定の困った子どものためだけじゃなく、もっと広くいろいろな子ども、若者・大人が来られる、つながりをつくれる場にすることが大切だと思います。

**加藤** 私も早川さんの考えに共感しますね。居場所は、そこにいる誰にとっても「居心地のよい空間」であることが大事です。誰かのためにと頑張っても、それは継続しにくいんですよ。居場所は、そこにいる特別な誰かがつくるんじゃないくて、そこにいる人皆でつくるから、その居場所になるんだと思います。

**若新** 居場所って簡単なようで難しい。特に今、私たちが「誰かを助けよう」というような気持ちで居場所をつくと誤った方向に行き

かねないんじゃないかと思っています。特に日本は、本当に困っている状況にある対象には公共の福祉が機能するようになっていきますよね。



「バスには  
たくさん大人が  
乗っているでしょう」



僕も、地元・福井で子ども食堂をやっています。でも、生活困窮の子を救おうなんて一切言わない。子ども食堂には、ご飯を作りたい人とご飯を食べたい人がいる。タイプの違う人が集まると、何かが生まれることに期待したい。そういう化学反応が起きるのが居場所だと思います。現代の社会っていろいろな娯楽もあるけど「こんな人いるんだなあ」ってことを知る、感じる、そんなことに枯渇してるんじゃないかな。「共存できる場があることで、人間のエネルギーが補完される！」みたいなことがあると思う。誰かを助けてあげるって言うてしまうとそれは共存ではないでしょう？

居場所は提供と消費の関係ではないから、ビジネスが参入できない。行政サービスでもない、ビジネスでもない、アップデートも自由な居場所には、大きな価値と可能性があると思っています。

**加藤** うれしいですね、そういう考え方。今、新しい社会をつくらなければならない時。人間が生きる目的は、生きること、生き抜くこと。沖縄で僕が改めて確信したのは、人間は、支え合うということでき生きられないし、生き抜けないということ。

対話を通して他の考え方に触れても、対立してしまうのではなくて、そこから見出す。居場所はそういうことができる場であり、そういう場があることが、新たな



社会をつくることにつながっていくのではないかと思います。

**佐塚** 居場所は「場」ではなくて、子どもに限らずそこに集う人々皆が、共に関係をつくり、信頼関係を築き、成長し合う。居場所自体も、変化するイメージですね。

一方で、少し皆さんにお考えを伺いたいのですが、今日、地域には、さまざまな

困難を抱える子どもや若者が存在することも分かっており、そういう子どもや若者の発見・対応が、公共のサービスで対応しきれているかという難しさもあるのが現状です。居場所でそういった子どもへの対応が求められることについてはどうでしょう？



**吉澤** 居場所に通う子どもが変化する時があるんですよ。心を開かなかった子どもが、居場所にいる友達や大人と積極的にコミュニケーションを取るようになる。笑顔が多く見られるようになる。不登校を続ける子どもも「くすのき広場」には来る。でも、根本的なところで本当に子どもが健全に、未来に夢を持って成長していくようにするには、家庭環境、保護者を変える必要もあるのではないかと思います。

でもうちの団地は、生活に困窮している世帯やひとり親世帯も多い。保護者もたくさんの困難を抱えているのかもしれませんが。今、団地では地域の母たちの会をつくって、保護者同士がもっと対話できるような関係づくりも必要かといった話も出ています。

**佐塚** 「くすのき広場」では、帰りにそれぞれの子どもの家の棟のエレベーター前まで送ることになっていて、子どもたちの中には「家の前まで来て」と頼む子もいるとか。

そしてボランティアが送っていくと、家には誰もおらず真っ暗で、食事の支度もできていない家にひとりぼっちという子どももいることを聞きました。それで「くすのき広場」では、おにぎり隊を結成しておにぎりのサービスをしています。また今後は、子ども食堂を立ち上げる計画もあることを伺いました。

**吉澤** そうですね。居場所をつくって、そこで子どもと大人、大人同士の関係ができてきたから、見えてきたこと、今後、取り組む必要があること、どんな風に取り

「大人はたいていケータイ電話を持っていないよね」



り組んでいくか、見えてくるように思います。

**早川** 以前より、子どもの発達障害の相談を受けていたお母さんが離婚。このお母さんには、居場所でボランティアをしてもらっています。ボランティアをしながら、他のボランティアのメンバーに子育てのことやさまざま、相談に乗ってもらえるし、社会に貢献できていることが、彼女の自己肯定感を高めているように思います。

仕事も私たちのネットワークの中で見つけました。本当に「丸ごと」ですよね。身近な地域の居場所は、その人の生活全部が見えるということでもあるんです。彼女との関係を積み上げの中で、見えてきたことに応じた、さまざまなサポートを、居場所外のネットワークによって提供している状況です。

**佐塚** 『子ども・若者の居場所づくり事例集2017』には、居場所での個別ケースへの対応については掲載していないのですが、どの居場所も個別の課題に対応している事例をもっていらっしやいます。居場所には、待たなしの課題を抱えるケースを発見したり、居場所だけではなく、内外の人や機関と協力して対応することもあるようです。

最後に皆さんから、コミュニケーションをテーマに開催した今回のフォーラムの感想と皆さんへのエールをお願いします。

**加藤** 私たちは、皆、どう生きるかが問われているのだと思います。こんな風に生きるべきみたいな既存概念にもとらわれがちなところを、違った生き方をしている人に出会い、関心を持ったり、共感したりしているうち、いつの間にか、自分も気付かないうちに生き方に変化がもたらされたりするのだと思います。

生きること、生き抜くことが人間の生きる目的と話したけれど、「命」についても最後にお話しします。

命が本当に花開くときは、命と命が出会わなければならないのです。その出会いの環境さえ整えば、それぞれの命は自ら育ちます。居場所は、学校、会社、地域、あらゆる場に必要なのではないでしょうか。暮らしの中

に命と命が出会える場をたくさんつくるべきでしょう。

**吉澤** 皆さんありがとうございました。これからも頑張ります。

**早川** 今日のテーマはコミュニケーションでしたね。実は、私、議論好きなんです。喧々譁々しょっちゅうやりながら生活していますが、対話を改めて大事にしていかなくちやと思いました。ありがとうございました。

**若新** 今日、困まり事をさまざま抱える人も多いけど、そこそこお金もあるし、それなりの社会的な役割もあるけど、自分の存在意義が感じられない人がいるのではないかと思う。ニートの若者が企業就労を成功しても、存在意義が見いだせなければ、意味が無い。

居場所は、存在意義が見いだせない人を集めて、誰かが提供するような場ではなく、そこに集う皆で見出す場なのではないかと思います。これまでの社会には無い可能性のある場だと思います。

**佐塚** 皆さま、ありがとうございました。

学生時代、社会学の先生がおっしゃっていたことを思い出しました。社会とは人々のコミュニケーションの連鎖によってつくられているということです。居場所での豊かなコミュニケーションが一人ひとりの生き方に力を与え、それが、広く社会を変えることにもなる。

居場所の大きな価値と可能性を改めて感じました。



こんな事情です、  
連絡をしたいので  
貸してください  
とお願いすれば、  
貸してくれる人は  
たいていいるでしょう。



参加者感想  
PICK UP

若新さんの講演で出てきた「安心のおしゃべり」は、子ども・若者だけでなくすべての人に必要だとも感じた。評価されない安心しておしゃべりできる居場所の大切さを改めて感じた。

(市民活動関係者・横浜市・60代)

講演の中で出てきた「対話」の大切さ。当人たちが会話の中から何かを見つけ実行するまでの忍耐強さが大事だと学びました。

(福祉施設関係者・横浜市・30代)

多世代が交流できる場をこれからも作っていききたい。大人にとっても子どもにとっても安心できる場所の必要性を感じた。

(居場所活動実践者・茅ヶ崎市)

吉澤さん(くすのき広場)の一步前に入る勇氣、早川さん(ほんそん子ども食堂)の実践、加藤先生のお話で、自分の考えと方向がはっきりした気がします。

(居場所活動実践者・鎌倉市・50代)

参加者が多彩!ワールドカフェでのそれぞれの立場・視点でのショートトークがとても興味深く、もっともっと聞きたかったです!シンポジウムでの、早川さん(ほんそん子ども食堂)の“じゃ、やっちゃおうか”の推進力がすごいと思った。やってみて必要とされることだからなのですね。つながること、巻き込むこと、信頼関係がキーワードだと思いました。あったかい居場所、自分らしく居られる人の関係…。まず我が子に足りているか。そして全ての子ども(見た目は大人でも心が子どもの全ての人)に満ち足りるよう、できることをできる時に少しずつ。そう思える人の輪を広げ、もっとももっとつながりたいと思いました。

(横浜市・50代)

若新さんのお話は分かりやすく共感できました。人類の次のステージ、あふれた水をどう形作るかという社会は楽しみでもあり、戦争や飢餓がなく、この悩みに向き合える社会がずっとあるとよいと思いました。「子どもの貧困」は分かりやすいが、大人も貧困の社会。子ども・若者支援だけでなく地域福祉を全体で考えられるとよいと思いました。

(行政・横浜市・40代)

子ども・若者に高齢者(元気高齢者含む)も入ること。世代を超えて共に生きるということを勉強していきたいです。

(居場所活動実践者・横浜市・50代)

大人から子どもへの直接的介入も必要ですが、協力してくれる子ども・若者をサポートする大人というのも大事だと思いました。大人より、子ども、若者に近い大学生の方が共通する部分も多く、理解もしやすい部分があります。ただ、経験が浅いので何をしてくれて何をしちゃダメなのかの判断が難しい場合があつたりします。そんな学生を「操る」のではなく、「協力・バックアップ」してくれる大人がもっとたくさんいてほしいなと思いました。(学生・20代)

地域に大勢いる人的・物的資源を掘り起こす努力、情熱、エネルギーが必要なことを痛感した。

(福祉施設関係者・平塚市・70代)

背中を押され、ますますやらなければならないことに気付かされました。

(居場所づくり実践者・小田原市・60代)



君ももう大きくなって  
いるのだから、  
困った時に  
泣くのはやめなさい。

知りたい ・ 聞きたい ・ 見つけたい

## My Favorite Movie, Book & Music



映画・本  
音楽

今回のガイドは居場所をつくり運営するために不可欠な「コミュニケーション(対話)」をテーマとしています。

Voices (P10 ~) のページで「私たちが目指す居場所での対話」を語ってくださった皆さんに、居場所のコミュニケーションについて軸としている考え方や、ヒントを得るものとして参考としている、また子ども若者と共有できる書籍や映画、思い出の歌などをご紹介します。

(加) 加藤、(山) 山崎、(石) 石井、(西) 西野、(吉) 吉澤、(永) 永岡 ※敬称略

掲載データは 2018 年 3 月現在の内容です



『臨床心理学』増刊第9号  
「みんなの当事者研究」  
熊谷 晋一郎 編  
金剛出版 2017年

経験は宝。どんな失敗や行き過ぎり体験も、そこには未来につながる大きな宝が眠っていることに気づく (加)

哲学・精神医学・教育学・現象学・社会的な検討を通じて当事者研究の歴史的背景や思想史、社会における位置づけなど、当事者研究の過去と現在を包括し、その未来までを予見していく、みんなで作るみんなの当事者研究入門ガイド。



『人間が好き』 八杉 晴実 著  
一光社 1996年

この本の中に「惚れちゃったらこっちのものよ、嫌われちゃったらそれまでよ」という大工の棟梁の言葉が出てくと記憶している。人と出会う時「先に惚れる」。その考え方を作ってくれたのはこの言葉かなと思う。学生時代に出会ったこの本は、いろんな言葉や人間への愛が詰まっていて、学校外での教育や育ちに目を向けたいきっかけでもある (西)



『ねこのピート だいすきなしろいくつ』  
作 / エリック・リトウィン  
絵 / ジェームス・ディーン  
訳 / 大友 剛 文字画 / 長谷川 義史  
ひさかたチャイルド 2013年

何が起きてもその時その時を楽しめるって素晴らしい。かなり最高! (山)

ポジティブシンキング最高! 子どもはもちろん、大人でも、ピートの前向きさに、いいね! と楽しくなれるはず。読み聞かせしても双方のコミュニケーションができて盛り上がること間違いなし。



『子どもへのまなざし』  
佐々木 正美 著 / 山脇 百合子 画  
福音館書店 1998年

子育てのバイブル (山)  
児童精神科医の子育て論。子どもに向けたまなざしだけでなく、人間全般に対するまなざしとして有意義。ジャッジせず、ありのままを受け入れる姿勢。望むことはすべて叶えてあげることの大切さ。子ども同士のコミュニティの大切さなど、示唆に富む内容。



『君たちはどう生きるか』  
原作: 吉野源三郎 漫画: 羽賀 翔一  
マガジンハウス 2017年

まさに対話の本!  
子どもから大人になるプロセスを共有できる (山)  
原作は1937年人でとしてどう生きるかを教示する人生哲学書。多感な学生、コペル君が主人公で学生生活を通して成長する姿が描かれています。さまざまなこととらわれがちな現代。忘れてしまいたいようなことを思い出させてくれる一冊。耳を傾け、良い方向性を示してくれるかじ取り役のおじさんの存在が大きい。



そう論じている  
彼女を見ながら友人は、  
子どもを育てるとは  
こういう事なのだと思った。

知りたい ・ 聞きたい ・ 見つけたい

## My Favorite Movie, Book & Music

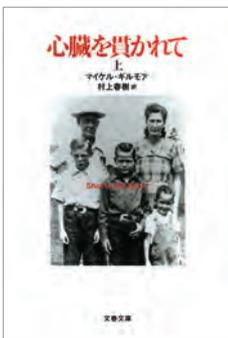


映画・本  
音楽



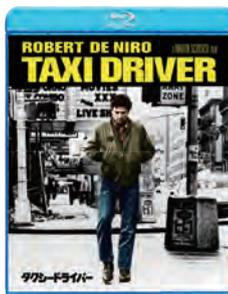
『子どもはおとなの育ての親』  
天野 秀昭 著 日本冒険遊び場づくり協会 2002年

プレーパークでの子どもとの関わりが丁寧に描かれている(山)  
東京都世田谷区から始まったプレーパーク。日本初の職業プレーリーダーとして携わってきた天野秀昭氏が著者。子どもの遊びを通して見えてくるものは何か。今こそ取り戻したい、子どもとの時間についてつぶられている。



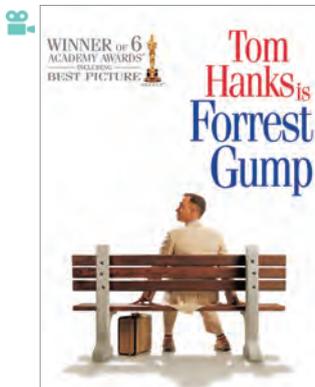
『心臓を貫かれて』  
マイケル・ギルモア 著  
村上春樹 訳 文春文庫 1999年

支援を始めたところに勧められて読んだ本。ある一家のトラウマのクロニクル。親子という関係の罪深さや、絆について考えさせられる(石)  
幼いころから愛を求めているながら無慈悲に打たれた主人公が、その後の人生において父親から受けた懲罰のドラマを、あらゆる権威を憎みつつ再現。荒廃に向かう彼を救済し自由にするのは死のみに。愛と暴力が同居して人を荒廃に誘う「家族・学校・刑務所・国家」。重要なメッセージを読者に訴える。



『タクシードライバー』  
販売元:ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

社会の中の孤独という絶望、そこから抜け出したいという渴望が暴力になる物語。主人公トラヴィスのような人は自分たちの傍に当たり前にいるんだと思う(石)



『フォレスト・ガンブ 一期一会』  
発売元:NBCユニバーサル・エンターテインメント

幸せってなんだだろうと、とても考えさせてもらえる映画です(永)  
フォレスト・ガンブは、頭はよくないけれど、誠実、優しい、前向き。何かを成し遂げたとしても、成し遂げられなかったとしても、彼は幸せ。そして、彼の周りにいる人々も幸せに。



『幸せのちから』  
販売元:ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

努力は報われる、という勇気をもたらせる(永)

子どもを守らなければならない時も仕事を懸命にこなし、子どもに不自由な生活をさせない父親の姿。チャンスを自分のものにする勝負強さ、根気強さ。ウィル・スミスとジェイデン・スミスの親子共演。



『さとに来たらええやん』  
監督 重江良樹 2015年  
製作・配給:ノンデライコ

子どもから学ぶ事が多い。そのことはどの地域でも同じだ(吉)  
西成地区のこどもの里が舞台。どんな子どもも受け入れる器の広い場所(山)

コミュニティとは。子育てとは。愛情とは。家族とは。さまざまな定義を織り交ぜながら「まちづくり」を問うている。



『みんなの学校』(C) 関西テレビ放送 2014年 配給:東風

公立の大空小学校の挑戦。誰も排除しない学校として、画期的な実践。子どもの置かれている厳しい状況がよく描かれている(山)  
相手を理解しようと努力すること。何も子どもに対してだけではない。大人社会にも大いに当てはまる。学ぶことの多い映画。

### 『チェリー』(シングル) スピッツ

夜の宿泊型支援施設の食堂で、ひきこもっていた若者たちと大合唱し、近所からクリームが来て奇跡だと思った。高校生たちもみんながこの歌を知っている(石)

そして、これからは  
どうしたらいいだろうか  
自分の頭で考える  
癖をつけなさい。



## 編集後記

特定非営利活動法人  
よこはま地域福祉研究センター  
センター長 佐塚 玲子  
役員員一同



子ども・若者の育ちと自立を支えるには？子ども・青少年の居場所づくりを推進するには？テーマに真正面から向き合う日々が続いています。同時に、同様のテーマに私たちと同じように向き合い、子どもや若者、仲間と共に地域社会で活動される方々にたくさん出会い、対話をさせていただく機会を得ました。事業にかかわり2年目の今、確信したことは、子どもや若者の育ちや自立も、子ども・青少年のための居場所も、大人が既成概念にとらわれて考え、つくるものではないことです。

第1号の事例集の制作時、さまざまな居場所を取材しました。活気があり、集う人々が生き生きしている居場所には「豊かな対話」があることに気がきました。子ども・若者・大人たち、それぞれが互いの存在を認め、互いが存在することで、生きるチカラを得ているように思いました。どんな居場所にも不可欠なものとは何か？それを、皆で検証するために、第2回のフォーラムのテーマは「コミュニケーション(対話)」としました。

講師の若新さんが「異なる人が集まると何かが生まれる。そんな化学反応がおきるのが居場所」「共存できる場所が人間のエネルギーを補完する」とおっしゃいました。実感です。

事業は、全体のちょうど半分のところに来ました。さらに、協働の歩みを進めていきます。これからの、さまざまな方々との出会いも楽しみです。今後ともよろしく願いいたします。

社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会  
会長 篠原 正治  
地域福祉推進担当職員一同  
企画調整・情報提供担当一同



本会が(特非)よこはま地域福祉研究センターと(福)神奈川県共同募金会と協働して「子ども・若者の育ちと自立を支える協働事業」に取り組み、また、県青少年課より「子ども・青少年の居場所づくり推進事業」の委託を受け、2年目となりました。

子ども・若者の居場所として、子ども食堂やフリースペース等、内容も担い手も多様に広がる今、そうした活動の必要性、今時の子ども・若者が抱える悩みとは、そもそも居場所とは何かという、漠然と捉えられていることをこれらの事業を通じて明確にし、発信し、共有したいと、ガイドや事例集の発行、フォーラムの開催を行っています。

こうした取り組みを通し、本県における居場所の取り組みが一層広がり、子ども・若者を支える活動からも地域のつながりづくりの輪が広がることを期待しています。今後ともご理解とご協力をお願いいたします。

### 今後の予定

- 2018年夏  
子ども・若者の居場所づくり事例集  
2号発行
- 2018年秋  
第3回フォーラム開催
- 2019年春  
ガイド vol.3 発行

社会福祉法人神奈川県共同募金会 会長 並木 裕之  
役員員一同



人々のライフスタイル等が多様化する現代社会の中で、共同募金会では、これからの共同募金の使命と役割を協議してきました。

この協議結果をもとに、本会では社会的な課題の解決に向けて、同じ目的を持つ公益活動団体等と協働して、ともに考え自らも実行していく、新たな取り組みを開始しました。2016年から展開している、(特非)よこはま地域福祉研究センター、(福)神奈川県社会福祉協議会との「子ども・若者の居場所づくり事業」は、共同募金会が直接事業に参画する全国初の取り組みです。

今年のテーマは「対話=コミュニケーション」。この事業を通じて、人と人、組織と組織のネットワークが、さらに広がることを心より願っています。

### Information

「子ども・若者の居場所づくりガイド」および事例集は本会ホームページより閲覧・ダウンロードできます。  
<http://www.knsyk.jp/s/shiru/seisyounen.html>



子ども・若者の居場所づくりガイド  
～導入編～(県委託事業) 2017年3月発行



子ども・若者の居場所づくり事例集  
2017年11月発行

そして自分は、  
我が子を、  
このように育てて  
きただろうかと、  
反省しきり  
だったといった。



子ども・若者の居場所づくりガイド **対話編**  
communication

---

神奈川県委託「子ども・青少年の居場所づくり推進事業」

企画・制作・発行：社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会・特定非営利活動法人 よこはま地域福祉研究センター

協力：社会福祉法人神奈川県共同募金会

発行：平成 30 年 3 月